

# 王丸清勢Ⅱ

福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書

第35集

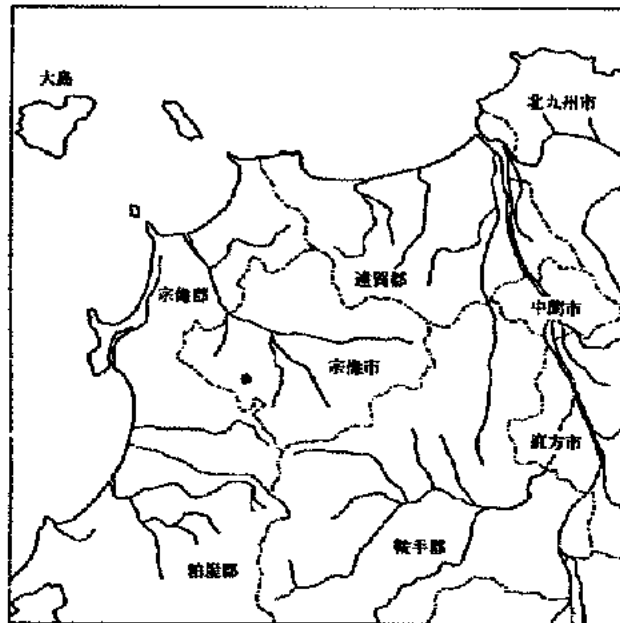
1992

宗像市教育委員会

O MARU SUI SEI  
王丸清勢 II

福岡県宗像市王丸所在遺跡の発掘調査報告

宗像市文化財調査報告書 第35集



1992

宗像市教育委員会

## 序 文

宗像市は福岡市・北九州市の中間に位置し、両大都市への通勤圏となっており、両政令都市の結節都市としての様相を濃くしています。本市はこのような状況のなかで、「学術・文化・国際交流都市」としての構想実現へ向けて着実に歩みを続けています。

本書は国道3号線の拡幅工事に伴い、遺跡の記録保存のため、建設省から委託を受けて実施した王丸清勢B遺跡の緊急発掘調査報告です。

宗像市の西部、宗像郡福岡町に近い当該遺跡の周辺は、四半世紀を遡る日の里団地の造成時に、弥生時代から中世にかけての集落、墳墓が調査されました。幸いなことに4基の古墳群と下層の弥生時代集落遺跡が現状保存されています。当該遺跡は許斐山の北麓丘陵に分布する古墳時代後期の古墳群の一支群にあたります。

今次調査では盗掘、破壊を受けていますが、5世紀代の墳墓として貴重な発掘調査となりました。遺跡の全体像については、今後の課題として取り組んでいきたいと考えています。

本書が、広く文化財の保護および学術研究の一資料として貢献することを念願するとともに、発掘調査に参加された方々の労苦と、ご協力いただいた関係者一同に対し、心から感謝の意を表する次第であります。

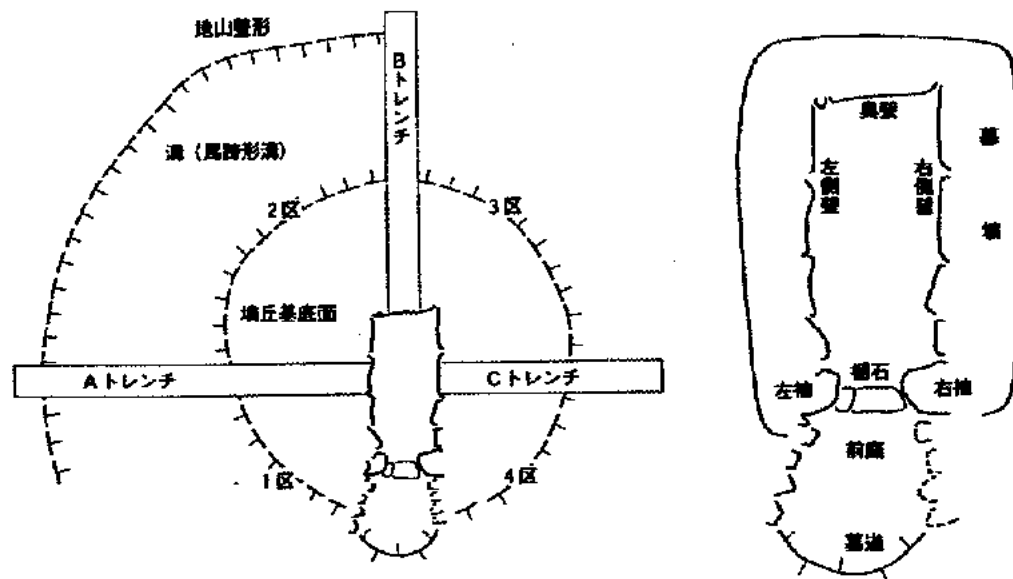
平成4年3月31日

宗像市教育委員会

教育長 森 下 照 清

## 例 言

1. 本書は、宗像市教育委員会が建設省から委託を受けた一般国道3号線宗像福岡バイパス建設にかかる埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、宗像市教育委員会が事業主体となって行った。
3. 遺跡は、宗像市大字王丸（字清勢）1031番地ほかに所在し、王丸清勢（おうまるすいせい）B遺跡と呼称し、福岡県文化財番号330529とする。
4. 遺構・遺物の実測・写真撮影は安部裕久が行った。
5. 遺構・遺物の製図は牧野淑子が、遺物の整理は法泉順子・高木成子・田島圭伊子・篠原啓子が行った。
6. 測量は、国土調査法第Ⅱ座標系をもちいた。
8. 本書の執筆は、第1・2章を原 俊一、第3・4章を安部、編集は安部が行った。



第1図 調査区及び遺構の名称

## 本文目次

	本文頁
第1章 はじめに .....	1
第2章 位置と環境 .....	3
第3章 発掘調査の記録 .....	10
第4章 まとめ .....	15

## 挿図目次

第1図 調査区及び遺構の名称	
第2図 事業計画図 (1/2,000) .....	2
第3図 周辺の遺跡 (1/5,000) .....	4
第4図 周辺遺跡の位置図 (1/50,000) .....	7
第5図 遺構配置図 (1/200) .....	9
第6図 SO1墳丘土層図 (1/80) .....	11
第7図 SO1主体部実測図 (1/40) .....	13
第8図 SO1出土遺物実測図Ⅰ (1/3) .....	14
第9図 SO1出土遺物実測図Ⅱ (1/2) .....	15
第10図 王丸清勢A・B遺跡の古墳主体部平面形の比較 (1/80) .....	16
第11図 王丸清勢A・B遺跡の古墳主体部比較 (1/60) .....	17

## 図版目次

図版1 遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影	
図版2 1. 調査前遺跡景観 (北から撮影) 2. 調査前遺跡景観 (北から撮影)	
図版3 1. 調査前遺跡景観 (南から撮影) 2. 調査前遺跡景観 (東から撮影)	
図版4 1. 調査後遺跡景観 (南から撮影) 2. SO1全景 (西から撮影)	
図版5 1. SO1奥壁 (西から撮影) 2. SO1左側壁 (南から撮影)	
図版6 1. SO1出土遺物 2. 王丸清勢A遺跡SO1出土遺物	

## 第1章 はじめに

### 1. 調査に至る経過

1991年7月3日付建九北調第77号により、建設省九州地方建設局北九州工事事務所から一般国道3号線宗像福岡バイパス建設予定地内の埋蔵文化財発掘調査についての依頼があった。

依頼地に隣接する宗像市大字王丸字清勢1043番地ほかは、前年度に宗像市の事業として東郷駅裏王丸線道路建設に伴い、当市教育委員会が緊急発掘調査を実施しており、今回の事業地が前記遺跡に包含されるものと推定されるため、現地踏査を行ったが、従前の国道工事および林地造成による地形改変のため、遺跡の所在を明確にできなかった。しかし、周辺の状況から表土下に遺構の残存することが十分に考えられた。

これを受けて、1991年11月28日付建九北調第130号の文書により、建設省から文化財保護法第57条の3第1項による埋蔵文化財発掘の通知がなされた。受理後の事前協議において遺跡の範囲について緊急発掘調査を実施して記録保存することを確認した。

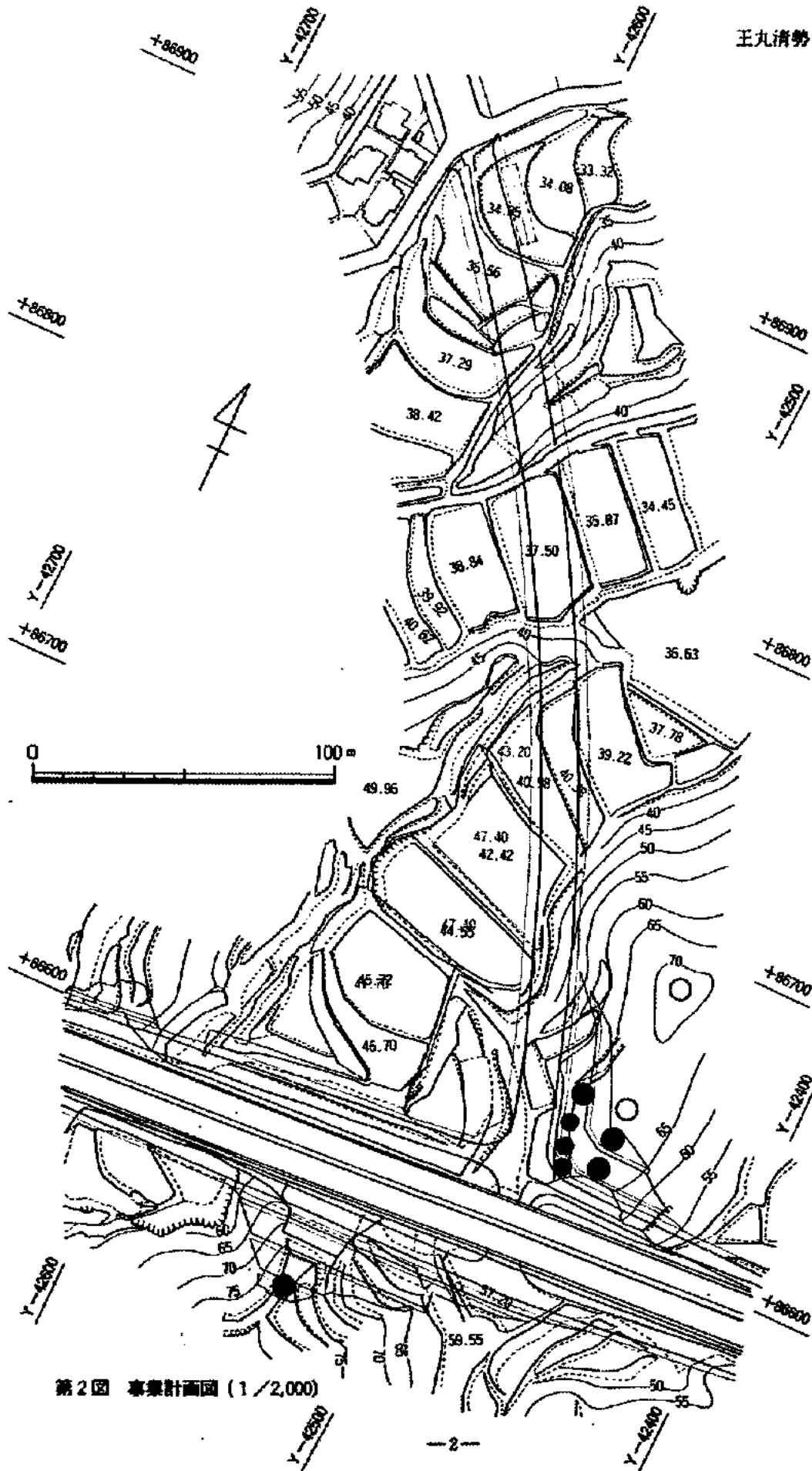
1991年10月2日付で、宗像市教育委員会と建設省との間で委託契約をおこない、1991年12月2日付3宗教社発第962号で、文化財保護法第98条の2第1項による埋蔵文化財発掘調査の通知を行って、同年11月25日から調査に着手した。同12月18日には現地調査を終え、引き続き整理に取りかかり、1992年3月31日に事業を完了した。

### 2. 発掘調査の組織

発掘調査は次のとおりの組織で実施した。

総括	宗像市教育委員会	教育長	森下照清
		教育部長	中山宏基
		社会教育課長	吉田繁利
		文化係長	尾山清
庶務会計		主事	北野隆文
発掘調査		技師	安部裕久
調査指導	東海大学福岡短期大学	教授	佐田茂

発掘調査にあたり、雪や寒風の中での調査に参加いただいた方々や調査全般にわたって協力いただいた建設省九州地方建設局北九州国道工事事務所および宗像市建設課担当職員の方々に対し、心から謝意を表す。



第2図 事業計画図 (1/2,000)

## 第2章 位置と環境

調査地は宗像市の西部にあり、宗像郡福岡町との境にある許斐山(271m)から北へ派生する丘陵に位置する(第4図)。この丘陵地一帯は、地質的には北崎花崗閃緑岩地帯となっており、表土は花崗岩の風化土層である砂質のもろい地層を形成している。

遺跡は標高80m前後の、狭い丘陵尾根線上にあり、古墳時代後期の古墳群で形成されるが、群のほとんどは国道3号線工事により消滅している。

王丸清勢A遺跡とは国道3号線に切られているが、立地的には別の一支群と考えられる。

遺跡の所在は宗像市大字王丸(字清勢)1031、1033番地内にある。

遺跡周辺の地形は深い谷地が入りこんでおり、この細い谷あいごとに小区画の水田が営まれている。調査地周辺の支丘陵上にも古墳群の形成が認められる。所在地と概要はつぎのとおりである。

王丸清勢A遺跡(第3図2) 7基の古墳で構成され、内6基の古墳を調査する。この支群は2時期に分けられる。大字王丸1041、1043番地に所在する。当支群の北側に7基の古墳からなる一群があり、大字王丸1043、1052番地に所在する。

王丸船差遺跡(第3図3) 3基以上の古墳で構成されている。大字王丸1124の1、3番地に所在する。

王丸長谷遺跡(第3図4) 5基以上の古墳で構成されている。大字王丸1135、1151の1、1153、1156の1～3、1158の2、4、1162の2番地に所在する。

王丸高熊遺跡(第3図5) 3基以上の古墳で構成されている。大字王丸1184、1186の1、1191番地に所在。

王丸清勢C遺跡(第3図6) 5基以上の古墳で構成されている。大字王丸1013、1015、1017の1番地に所在する。

王丸長原遺跡(第3図7) 2基以上の古墳で構成されている。大字王丸998、999の2、1000番地に所在する。

いずれの遺跡も南北に細長く延びる丘陵尾根線上に分布し、当遺跡と同時期の横穴式石室を内部主体とする古墳群であろう。



本遺跡の背後にある肝斐山は、平安～戦国期の肝斐山城（第4図19）のあったところで、大治年間に宗像大宮司氏平が創築した。この城は天正11年に大友宗麟の武将立花道雪、高橋紹運が攻略し、立花氏の持城となった。天正15年には豊臣秀吉の九州出兵ののちに壊された。

宗像市の西部から福岡町の東部域は、ここ20数年間の大型宅地造成や国道バイパス工事などに伴って、数多くの遺跡が破壊、消滅の被害を受けている。かろうじて消滅をさけて調査できた遺跡、遺構を一覧表により示しておきたい。



第3図 周辺の遺跡 (1/5,000)

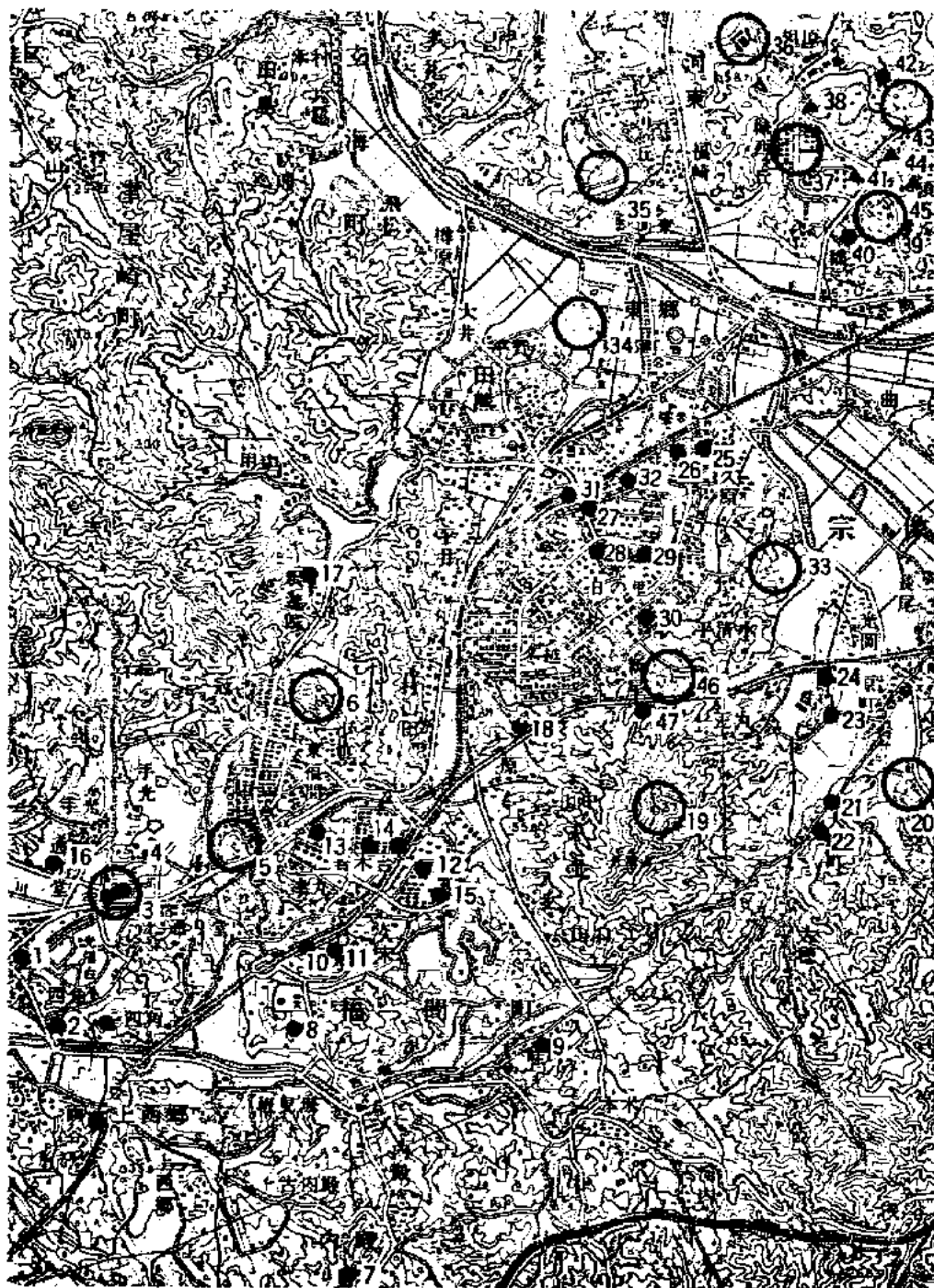
1. 王丸清勢B遺跡
2. 王丸清勢A遺跡
3. 王丸船差遺跡
4. 王丸長谷遺跡
5. 王丸高熊遺跡
6. 王丸清勢C遺跡
7. 王丸長原遺跡

番号	遺跡(遺構)名	所在地	調査の概要	支那
1	福正寺古墳	宗像郡福岡町大字福正寺1857	円墳 横穴式石室 勾玉5 薬玉4 切子玉1 管玉2 方柱形ガラス玉1 丸玉82 耳環7 刀子1 鉄鏃6	6C中 1
2	龜山古墳	宗像郡福岡町2885	前方後円墳 主体部不明 全長(28m) 後円部径21m 岡高5m	
3	手光波切不動古墳	宗像郡福岡町大字手光1135の1	円墳 横穴式石室	7C 2
4	手光古墳群	宗像郡福岡町大字福岡・手光	南地区古墳4 形式石棺 横穴式石室 石槨系横穴式石室 鉄剣 鉄刀 鉄子 石製石突き 鉄具 聖金具 注金具 鉄斧 羽子板形鉄器 タガネ状鉄器 金釘 刀子 耳環ほか	5・6C 1
			北地区古墳5 石槨系 横穴式石室 石槨系横穴式石室 鉄剣 鉄刀 鉄子 鉄具 雲珠 聖 注金具 鉄斧 タガネ状鉄器 鉄鏃 刀子 耳環ほか	5・6C 1
5	津丸高平遺跡	宗像郡福岡町大字津丸1179の2	古墳3 経塚 銅製経筒	6・12C 3
6	小竹古墳	宗像郡福岡町小竹	円墳 横穴式石室	7C
7	旦の原古墳	宗像郡福岡町大字上西郷2072の2	円墳 横穴式石室	6C
8	神興庵寺	宗像郡福岡町大字津丸字元神興616の1	寺院跡 鴻臚館式古瓦 越州窯系青磁 龍泉窯系青磁	8~12C 4
9	畦町遺跡	宗像郡福岡町字畦町	鴻臚館式古瓦	8~9C 5
10	津丸五郎丸遺跡	宗像郡福岡町大字津丸字五郎丸	包含層 須恵器 土師器 越州窯系青磁 古瓦 滑石石鍋 滑石子持勾玉 砥石 銅 鉄刀 鉄釘	6~10C 6
11	久末大塚古墳	宗像郡福岡町大字久末	円墳	6
12	長尾古墳群	宗像郡福岡町大字津丸字長尾	古墳2 横穴式石室 須恵器 土師器 鉄鏃 刀子 鉄製石突き 鉄刀 馬鈴 注金具 鉄具 聖金具 耳環 勾玉 小玉 土玉 石製小玉 ガラス玉	6C 7
13	野間尻古墳群	宗像郡福岡町大字津丸	古墳7 包含層 横穴式石室 須恵器 土師器 刀子 龍泉窯系青磁	5・6C 7
14	長林古墳群	宗像郡福岡町大字津丸字長林	古墳2 横穴式石室 土師器	5C 7
14	赤ハゲ遺跡	宗像郡福岡町大字久末字赤ハゲ9	円墳か? 須恵器	7
15	飛塚古墳群	宗像郡福岡町大字久末字飛塚	古墳9 横穴式石室 須恵器 土師器 鉄鏃 鉄刀 刀子 鉄製石突き ガラス小玉 土製小玉 石製小玉 鉄製小玉 メノウ小玉 耳環	6C 7
16	手光長畑遺跡	宗像郡福岡町大字手光字長畑230	古墳1 中世集石遺構 組合せ式箱式石棺 鏡 五輪塔 火葬骨 土師器 陶器 丸瓦	4~5C 14C前半 8
17	大井大屋敷遺跡	宗像市大字大井1489-1	住居跡 土師器 青磁	12C 9
18	村山田高江遺跡	宗像市大字村山田字高江742の4他	古墳3 横穴式石室 銅鏡 耳環 鉄鏃 鉄刀 刀子 土製丸玉 須恵器 土師器	6C 9
19	許斐山城	宗像市大字王丸	中世山城	16C 10
20	野坂一町間遺跡	宗像市大字野坂字一町間2278他	住居跡9 堀立柱建物1 弥生土器 須恵器 土師器 蟹 鉄鏃 紡垂車 投弾 土製模造鏡 石鏃 石包丁 石斧 砥石 弥生4	4~6C 9
21	大徳町原遺跡	宗像市大字大徳町278他	古墳3 堀立柱建物 須恵器 土師器 鉄製の針 馬鈴 金銅冠? 圭頭大刀 雲珠 杏葉 鉄鏃 刀子 勾玉 耳環 玉	6C~
22	大徳町可口遺跡	宗像市大字大徳町130他	古墳5 須恵器 土師器 馬鈴 鉄刀 鉄鏃 刀子 勾玉 耳環 玉 帯 鉄斧	6C中~後半 11
23	王丸河原遺跡	宗像市大字王丸36他	住居跡10 須恵器 土師器 滑石正有孔円盤 滑石製白玉	古墳初6C 9
24	光岡草場遺跡	宗像市大字光岡588の1他	古墳1 土壇墓24 弥生土器 鉄刀 鉄鏃	弥生中期古墳 12

25	東郷登り立遺跡	宗像市大字東郷634 635 637~640 645他	住居跡 石蓋土墳墓 弥生土器	弥生後期	13
26	東郷高塚遺跡	宗像市大字東郷699 701~703 709	貯蔵穴 前方後円墳 円墳3 火葬土壇 粘土槌 弥生土器 石包丁 須恵器 土師器 勾玉 管玉 鉄剣 鉄刀 鉄矛		14
27	スベットウ古墳	宗像市大字田熊字中尾640他	前方後円墳 横穴式石室 須恵器 土師器 弥生土器 桂甲 紋具 刀子 鉄鏃 冠 ガラス玉 土鏃	6C	13
28	東郷2号墳	宗像市大字田熊字高野尾322	円墳 横穴式石室 須恵器 鉄刀		13
29	東郷7号墳	宗像市大字田熊字黒田155-2	円墳 箱式石棺?		13
30	東郷8号墳	宗像市大字田熊字五行226-2他	円墳 横穴式石室		13
31	田熊中尾遺跡	宗像市大字田熊字中尾648	包含層 弥生土器	弥生前~中	13
32	田熊上ノ畑遺跡	宗像市大字田熊字上ノ畑409~411	住居跡 包含層 火葬土壇 高麗青磁 弥生土器 土製品	弥生中ほか	13
33	久原遺跡	宗像市大字久原388他	土墳墓41 貯蔵穴18 甕棺墓5 弥生土器 石包丁 銅劍 銅矛 石剣 石鏃 古墳50 石棺墓3 石蓋土墳墓4 住居跡1 須恵器 土師器 鏡 銚 馬鈴 辻金具 鉄斧 鉄刀 雲珠 鉄鏃 勾玉 管玉ほか 土壇墓3 掘立柱建物1 大津 土師器 瓦器 石鍋 陶磁器 鏃	弥生前~中 4~7C 12~13C	15
34	大井三倉遺跡	宗像市大字大井272他	住居跡13 貯蔵穴3 土壇墓6 甕 石蓋土壇墓3 小石室2 石蓋墓2 横穴墓 古墳6 (横穴式石室) 石棺 石蓋 土壇 鉄鏃 石包丁 石斧 鉄刀 鉄鏃 鏡 耳環 辻金具 鉄行囊器ほか		16
35	久戸古墳群	宗像市大字河東1629他	古墳20 (横穴式石室 箱式石棺 土壇墓 掘立柱建物 横穴) 横穴墓17 小石室2 横穴式石室1 石蓋土壇墓1 鉄器 土師器 陶器 土師器 鏡 銚 馬鈴 辻金具 鉄斧 鉄刀 雲珠 鉄鏃 勾玉 管玉ほか		17
36	相原古墳群	宗像市大字河東470他	前方後円墳1 古墳41 (内5基現存) 横穴式石室 須恵器 土師器 耳環 新羅土器 鉄刀 鉄鏃 王 管 鉄斧 銚 桂甲 刀子 雲珠 鉄鏃		18
37	稲元古墳群 I	宗像市大字稲元1350他	古墳7 横穴式石室 石蓋土壇墓 土壇墓 横穴式石室 刀子 鉄鏃 銚 須恵器 土師器		19a
	II		古墳5 横穴式石室 鉄刀 鉄鏃 土製王 須恵器		19b
38	稲元黒巡遺跡	宗像市大字稲元1519の1他	竊跡群 A区3+α B区1+α 須恵器ⅢB期		
39	稲元久保遺跡	宗像市大字稲元1304他	貯蔵穴5 土壇墓15 土壇12 古墳14 横穴 (Ⅲ群48墓道72主体) 地下式横穴3 柱穴群1 近世墓1 弥生前・中4~7C		
40	稲元堂ノ裏遺跡	宗像市大字稲元1287	古墳2 石蓋土壇墓 蔵骨器須恵器 土師器 陶磁器	4~5C	
41	稲元日焼原遺跡	宗像市大字稲元1403の1	竊跡4 須恵器Ⅱ~ⅢB 土馬 紡錘車	5C末~6C後半	20
42	河東大浦遺跡	宗像市大字河東186他	竊跡? 土馬		21
43	須恵須賀浦遺跡	宗像市大字須恵593他	古墳13 竊跡24 横穴76	6C前半~7C末	
44	稲元日焼原新遺跡	宗像市大字稲元1439の6他	竊跡3 須恵器ⅢB~	6C後半~	22
45	稲元宮ノ裏遺跡	宗像市大字稲元1016他	竊跡 須恵器ⅢB~	6C後半~	23
46	王丸清勢A遺跡	宗像市大字王丸1043他	古墳6 須恵器 土師器 鉄刀 刀子 鉄鏃	5C末~7C	24
47	王丸清勢B遺跡	宗像市大字王丸1031他	古墳1 土師器 鉄刀	5C末~7C	

第1表 周辺の遺跡一覧

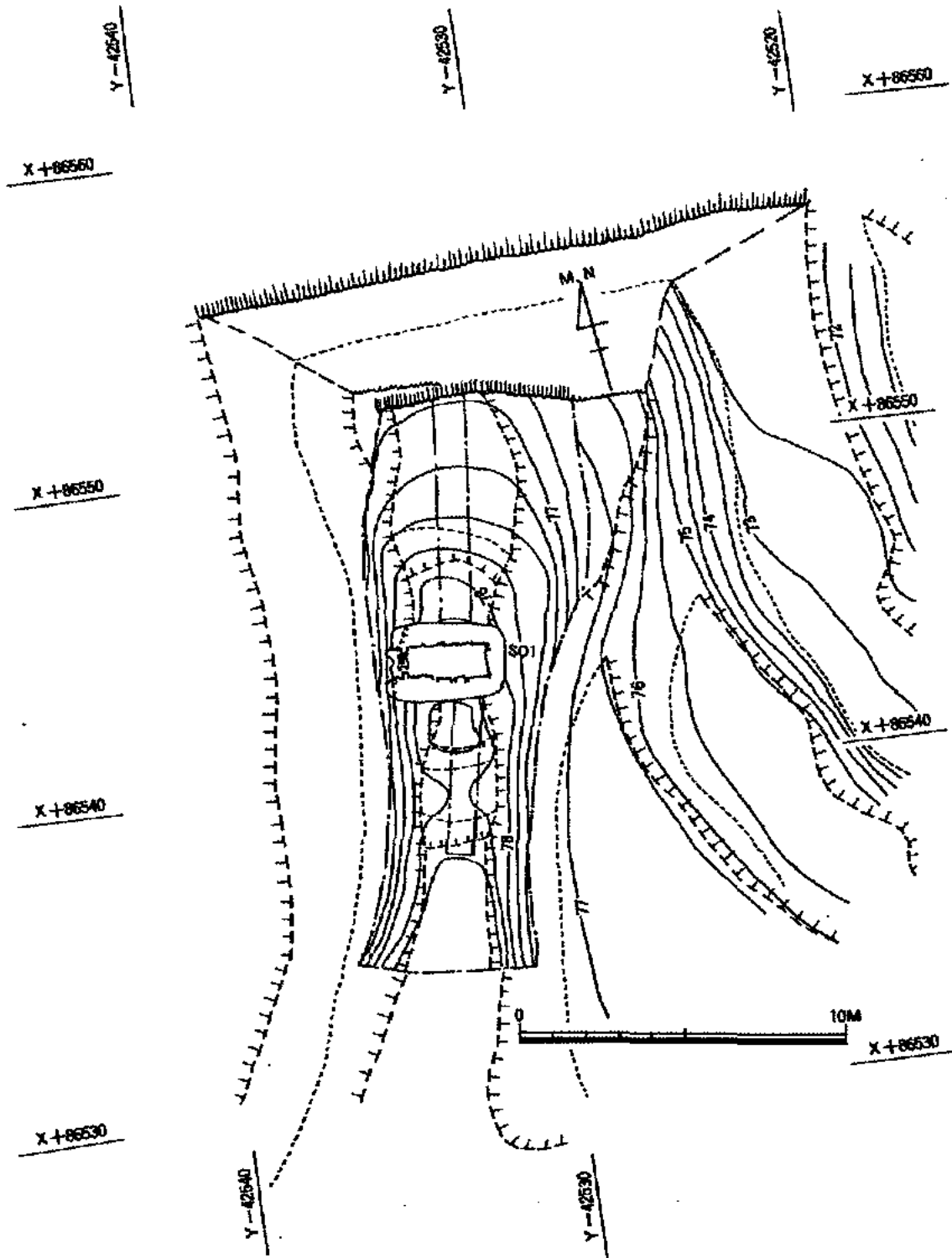
王丸清勢 B



第4回 周辺遺跡の位置図 (1/50,000)

## 文 献

- 1 福岡県教育委員会 1981 手光古墳群Ⅰ 福岡町文化財調査報告書 第1集
- 2 前川咸洋 1967 手光波切不動古墳 宗像郷土研究 第1号
- 3 宗像市地区社会教育振興協議会 1991 宗像の遺跡をたずねて -文化財所在マップの手引き-
- 4 a 九州歴史資料館 1974 九州古瓦と寺院  
b 九州歴史資料館 1981 九州古瓦図録  
c 伊東尾四郎 1944 宗像郡誌 上
- 5 a 青柳種信編 筑前国観風土記  
b 青柳種信編 筑前国観風土記拾遺  
c 九州歴史資料館 1981 九州古瓦図録
- 6 福岡県教育委員会 1973 津丸五郎丸遺跡 福岡バイパス関係埋蔵文化財調査報告書
- 7 波多野皖三編 1974 津丸・久末古墳群 福岡教育大学歴史研究部考古学班
- 8 福岡町教育委員会 1986 手光長畑遺跡 福岡町文化財調査報告 第2集
- 9 宗像市教育委員会 1985 大井大屋敷遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 -1984年度- 宗像市文化財調査報告書 第9集
- 10 a 福岡県教育委員会 1979 九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告 X X IX  
b 伊東尾四郎 1944 宗像郡誌 上
- 11 宗像市教育委員会 1983 大徳町町口遺跡 宗像市文化財調査報告書 第13集
- 12 宗像市教育委員会 1987 光岡草場遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書 -1986年度- 宗像市文化財調査報告書 第12集
- 13 福岡県史跡調査会 1967 東郷遺跡群
- 14 宗像市教育委員会 1989 東郷高塚Ⅰ 宗像市文化財調査報告書 第21集
- 15 a 宗像市教育委員会 1988 久原遺跡 -概報 古代宗像をさぐる- 宗像市文化財調査報告書 第19集  
b 宗像市教育委員会 1988 久原遺跡Ⅰ 宗像市文化財調査報告書 第23集  
c 宗像市教育委員会 1988 久原遺跡Ⅱ 宗像市文化財調査報告書 第26集
- 16 a 宗像市教育委員会 1986 大井三倉遺跡 埋蔵文化財発掘調査概報 宗像市文化財調査報告書 第10集  
b 宗像市教育委員会 1987 大井三倉遺跡 宗像市文化財調査報告書 第11集
- 17 a 宗像町教育委員会 1979 久戸古墳群 宗像市文化財調査報告書 第2集  
b 宗像町教育委員会 1980 久戸古墳群Ⅱ 宗像市文化財調査報告書 第3集
- 18 a 宗像市教育委員会 1979 相原古墳群 宗像市文化財調査報告書 第1集  
b 花田勝広 1990 宗像・相原古墳群の検討 地域相研究 第19号
- 19 a 稲元古墳群調査団 1976 稲元古墳群 第1期調査報告  
b 稲元古墳群調査団 1976 稲元古墳群 第2期調査報告
- 20 宗像市教育委員会 1989 稲元日院原 宗像市文化財調査報告書 第22集
- 21 田中幸夫 1935 筑前免見祝登馬の二例 考古学雑誌25巻7号
- 22 轟 次雄 1979 宗像郡須惠新池の窯跡群の須惠器 響周の朋 6号
- 23 中川研治 1980 宗像郡河東字須惠周辺に所在する窯跡群について 地域相研究 8号
- 24 宗像市教育委員会 1991 王丸清勢 宗像市文化財調査報告書 第33集



第5圖 堤横配置圖 (1/200)

### 第3章 発掘調査の記録

許斐山(271m)から北に派生し、王丸清勢A遺跡へと続く舌状丘陵上に位置する当調査区域における遺跡の現況は、北を国道3号線、東を畑地、西と上面を植林によって著しく削平されている。調査区域と現在の谷水田面との比高差は、約23mほどあり、狭長な長方形を呈している。丘陵上には墳丘らしい高まりなどは見られず、一見遺構の存在を疑うような観である。しかし、落葉と腐葉土に埋もれかけた石材などが散乱していることから古墳の存在を確認することができた。

伐採後の現況地形測量では、平坦な丘陵尾根線上に等高線が緩やかに北へ向かって傾斜する状況が観察される。この等高線で、標高78.0mから78.5mのあいだの間隔をみると他の等高線より間隔が広くなっており、その部位に古墳の石材が散乱している。また、著しく削平された北、東、西は、北と西は急激に降る崖面を、東は幅が2m～5mほどでおのおの1m～2mほどの段差をもつ伏長な段々畑地を形成している。

今回の調査は、伐採後の現地測量などの結果から、丘陵斜面については削平が著しいため遺構の存在は確認できず、丘陵尾根線上を中心に調査を進めることとなった。

#### 1. S01

当調査区域内で唯一の遺構(第5図)である。丘陵尾根線上に位置し、西方向に開口する横穴式石室を内部主体とする古墳で、直径約7mほどをはかる円墳である。

現況では、古墳上部が削平され、石材が散乱していることからかなり石室残存率が低いものと推測されたが、発掘調査の結果、石室天井と床の敷石を抜かれただけのもので、ほぼ旧状に近い形を留めているものである。

主 軸	墓壇長	墓壇幅	墓壇深	墓壇底長	墓壇底幅	墓道長	墓道幅
N-83°-W	3.42m	2.46m	1.27m	3.04m	2.22m	20cm	1m

第2表 S01主体部 計測表I

石室全長	前庭部長	前庭部幅	玄門部長	玄門部幅	玄室長	最大玄室幅	玄室高	掘石高
2.84m	0.25m	0.78m	0.25m	0.44m	2.34m	1.00m	1.22m	25cm

第3表 S01主体部 計測表II

1) 墳丘 (第6図)

当古墳における墳丘の現況は、墳丘の上面と西方向を植林に、東方向を畑地に、北方向を国道3号線によって削平されている。しかし、丘陵尾根線上で南北方向に設定したトレンチによって古墳地山整形面を確認することができ、ほぼその規模をつかむことができた。

古墳南側設定のトレンチでは、石室の主軸線から南へ5.44mの地点を最大径とする幅2.76mの馬蹄形溝(第1・5図)を確認した。この溝は、断面逆台形を呈するもので、当古墳と丘陵南部分を隔するものである。また、石室の主軸線から南へ2.68m地点で墳丘盛土基底面、3.14m地点で墳丘裾部をそれぞれ確認した。

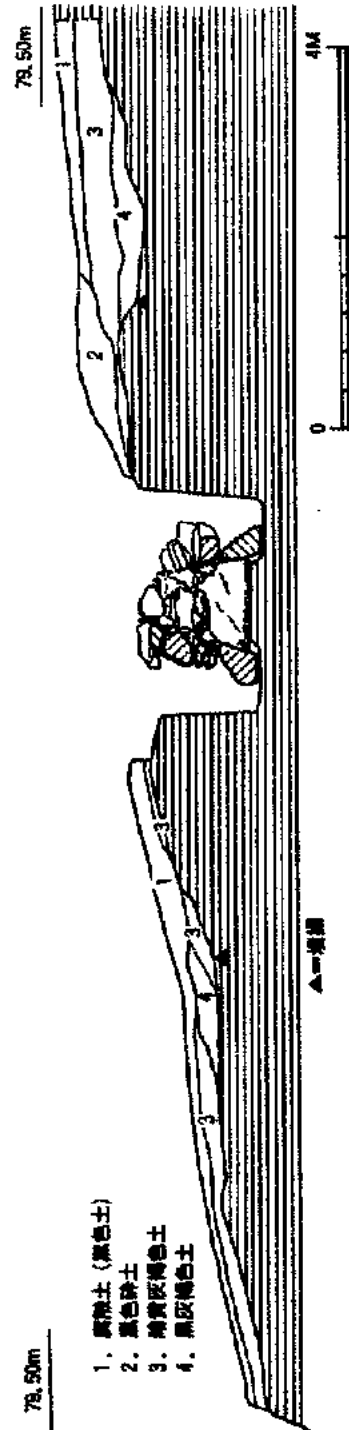
古墳北側設定のトレンチでは、石室の主軸線から北へ2.96m地点で墳丘盛土基底面を、3.94m地点で墳丘裾部をそれぞれ確認した。

これらの状況から当古墳の墳丘は、地山整形によって、丘陵尾根線上に上底径5.64m、下底径7.08m、高さ30cmの円錐台形をつくり、その上面を盛土(想定1mほど)で覆う工程で築造された円墳であることがうかがえる。

2) 主体部 (第7図)

墳丘盛土基底面(径5.64m)のほぼ中央に深い墓壇が掘り込まれ、この中に西方向へ開口する横穴式石室が築かれている。

墓壇 長辺3.42m、短辺2.46mの長方形を呈しているもので、西短辺には幅1mほどの短い墓道が付設されている。墓壇底面は、奥壁と左



第6図 SO1墳丘土層図 (1/80)



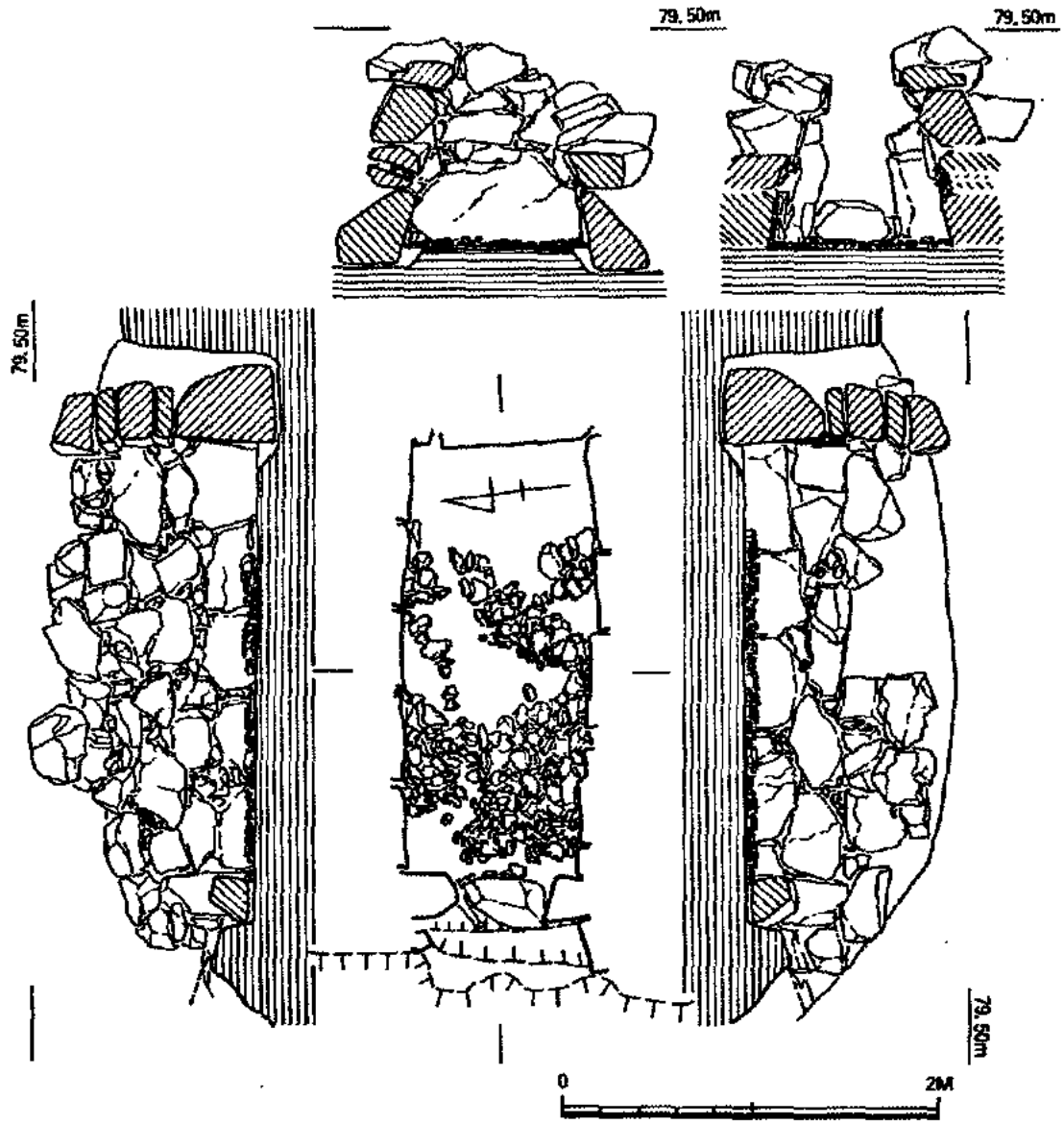
右側壁の腰石を安定した状態でおさめるためか墓墳底周壁を10cmほど廻りくほめ、平面観で「コ」字の周壁状溝をもった長方形を呈している。その法量は長辺3.04m、短辺2.22mをはかる。また、削り出された石室床面となる台状の部位の法量は、長辺2.10m、短辺0.80mをはかる。墓墳上面から墓墳底にいたる深さは1.27mであるが、本来の墓墳深はこれより幾分深く石室天井下面が完全に埋没する深さを有していたものと考えられる。また、墓墳西短辺に付設された墓道は、現況では20cmほど延びたところで削平されているが、本来の墓道長は1mほどあり、墓道床面は石室玄門部に向かって緩やかに下降するものと考えられ、玄門部楣石上面に続いている。

石室 主軸をN-83°-Wにとる単室両袖の横穴式石室である。当石室は、前庭・玄門・玄室の3部から構成されており、現況では前庭部基底石を除くほとんどの石材、玄門部天井石、玄室天井石を欠失している。古墳各部位の石材は、腰石は割石石材を横方向に立て長方形に整えてる。腰石上面の石材は、塊石を石室内から外に向けて縦長となるように積み上げている。古墳各部位の法量は、主軸上で計測して、全長2.84m、前庭部長0.25m、玄門部長0.25m、玄室長2.34mをはかる。幅は前庭部幅0.78m、玄門部幅0.44m、最大玄室幅1.00mをはかる。高さは玄室高1.22m、袖石高50cm、楣石高25cmをはかる。古墳各部位の構造は、以下のようである。

前庭部は、墓墳壁と玄門部のあいだに位置し、上部に天井石を架構しない構造である。基底となる腰石を左右にそれぞれ1石づつ配し、その上段に塊石を積み上げ玄門部前面と墓墳壁とのあいだを補填しているようである。この構造は、石室玄門部から前方向にかかる上部圧を玄門2点支持から4点支持へと強化して石室の倒壊を防ぐものといえよう。

玄門部は、玄室の前面を構成する門構造である。これは、直角三角形2つと長方形の穴とによって構成された台形状の正面観を呈している。この門の基底となる腰石は柱状の石材を左右にそれぞれ1石づつ配し、石室高の中ほどまでの玄門部を形成している。その上段には、主軸方向に直交する石づかいで塊石を積み上げ玄門上部を形成しているが、この石積みは玄室側壁から一連の壁体を構成している。また、この玄門部袖石間には、主軸方向に直交する石づかいで1石の塊石を置き、石室の内外を仕切る欄を構成している。この石により、墓道底面と玄室床面とのあいだに1段の段差をもうけている。

玄室は、平面形が長方形プランを呈しており、奥壁に1石、左側壁に5石、右側壁に4石の腰石を配している。この腰石間の下部には、それぞれ人頭大から拳大の石を配して根石となし、石室上部から各腰石にかかる圧力を分散する構造を備えている。床面には拳大の石を全面に置き敷石となす。その上面には、赤色顔料が塗布されている。玄室断面形は縦方向で長方形の箱形、横方向で台形を呈している。奥壁の壁体は、腰石1石をもって、玄室高のほぼ半分くらいの高さまでを構築し、その最高点を基準として塊石を積みほほ水平となる面を整える。この上の塊石を3段ほど積んでその上面に天井石を架構する構造である。左右側壁の壁体は、左腰石で5石、右腰



第7圖 S01 主体部実測図 (1/40)

石で4石とその腰石配置数がことなるものの、その基本的構成に変わりはない。つまり、棚石上面と奥壁上面を結ぶ線を設定し、これを基本的に腰石で構成する。一部調整のつかないところ限って塊石を積んで面を整える。つぎに、袖石上面と腰石上面を結ぶ線を設定し、塊石を積んでほぼ水平となる面を整える。この上に塊石を3段ほど積んでその上面に天井石を架構する構造である。

3) 出土遺物

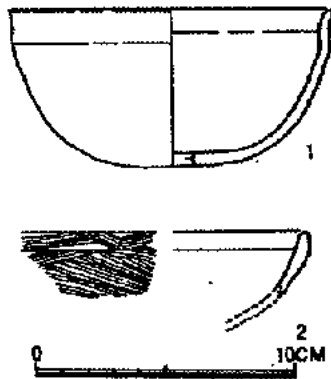
石室床面は、盗掘時の攪乱によってかなり痛んでいる状況であった。よって、遺物の出土状況は、ほとんど原位置をとどめていないものと推測される。とくに破砕状況で出土した土師器杯は、石室中央よりやや奥壁よりの位置と墓道の埋土中からその破片が出土しており、盗掘時の攪乱の激しさがうかがいしれる。また、鉄刀破片にしても、そのほとんどが検出されず、当報告書で図示したものだけにとどまっている。

番号	器種	口径	器高	調 整	胎 土
1	杯	12.6cm	6.2cm	外内：ヘラ研磨	黒色の灰石砂粒と金雲母、主色：茶褐色でキメ粗
2	鉢	20cm以上	—	外：削りテ、内：底部一口縁部で右回りの縞目状工具痕テ	黒色の石灰砂粒と金雲母、主色：黄灰褐色でキメ粗

第4表 SO1 出土遺物 計測表I

番号	器種	現存身	現存幅	身圧
3	鉄刀	28mm	25mm	7mm

第5表 SO1 出土遺物 計測表II



第8図 SO1 出土遺物 I (1/3)

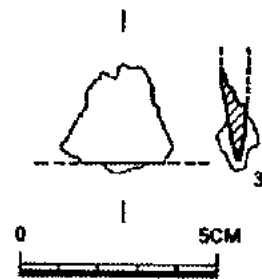
土師器(第8図) 1は杯である。口径12.6cm、器高6.2cmをはかる。器形は、底部から体部にかけて球を半分に切ったように立ち上がり口縁部はやや体部を内彎させたところからやや外反するようにつまみあげ、端部を丸く納めている。このため口縁部と体部のあいだには軽い屈曲が生じている。器表の調整は、内外面ともヘラ研磨調整を行っており、その調整方向は、底部では上下ないし左右のジグザグ運動による調整が施され、体部から口縁部にかけては横方向のジグザグ運動による調

整が施されている。その調整は全体におよび細かい丁寧なものである。色調は、内外面とも茶褐色を呈している。胎土は、微粒の長石砂粒と金雲母が観察され、素地は茶褐色を呈するキメの細かいものである。

2は鉢の破片である。器形は、個体が細かいため傾き、口径については不明であるが、ゆるやかに内彎しながら口縁部では直立し、端部を丸く納めるもので、口径は20cmを超えるものであろう。器表の調整は、内面で底部から口縁部に向けての方向で、時計回りに刷毛目状の工具による横ナデ調整を施している。外面は横ナデ調整を施している。

色調は、内外面とも黄灰褐色を呈している。胎土は、微粒の石英砂粒と金雲母が観察され、素地は黄灰褐色を呈するキメの細かいものである。この遺物は、当古墳の地山整形面の範囲から南側に大きくはずれた調査区南端で出土しており、直接当古墳の築造に関係するものではないが、当調査区の南側にのぼる丘陵上に遺構の存在をうかがわせる資料となろう。

鉄器(第9図) 3は鉄刀片である。あまりにも細片のため、刀身の最大厚0.7cmをはかり知るのみで、刀身長、刀身幅については不明である。



第9図 SO1出土遺物 II (1/2)

## 第4章 まとめ

当遺跡の分布する丘陵は、許斐山から北にのびる舌状丘陵のうち、王丸船差遺跡、前年度調査の王丸清勢A遺跡、そして王丸清勢C遺跡などの分布する丘陵(第3図)で、現在、23基ほどの古墳が確認されているが、東西に走る国道3号線によって南北に分断されるかたちとなり、古墳の分布も王丸清勢A遺跡と王丸清勢C遺跡のあいだにかなりの間隔ができる観があった。

今回、当遺跡の調査によって、古墳1基を確認し、古墳の分布間隔が、丘陵地形から古墳の分布を大きく4区分できる。それは丘陵頂部を占める王丸清勢C遺跡の一群、丘陵基部を占める当遺跡の一群、丘陵枝部を占める王丸清勢A遺跡とその北に分布する一群、そして丘陵端を占める王丸船差遺跡の一群である。このうち丘陵枝部を占める一群は、前年度の調査で、群構成を明らかにしている。また、今回の調査で、丘陵基部を占める一群を明らかにした。

この章では、前回、今回の調査で検出された7基の古墳を比較、検討することで、当遺跡のまとめとしたい。なお、この章での古墳分類は、王丸清勢A遺跡報告によるところが大きく、各説明を独自に記号化したものである。

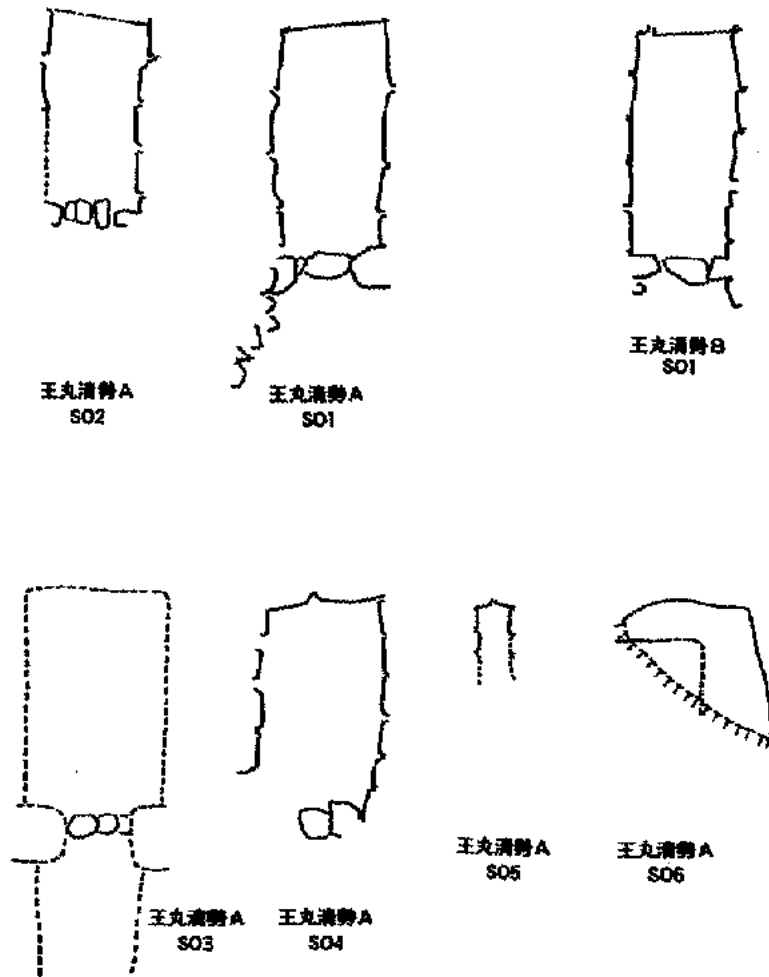
丘陵占地の比較（第3図）丘陵尾根線上をA類とし、丘陵斜面をB類とする。

石室構造の比較（第10・11図）古墳築造に際して、A類のうち、墓壇底に根石構造をもたないものをI類とし、墓壇底に根石構造をもつものをII類とする。また、B類のうち、長方形プランのものをIII類とし、これに付随する形で分布する小型の石室をIV類とする。

当遺跡 SO1は、II類に属し、王丸清勢A遺跡 SO1と同類となる。そこで、この両者を比較すると、まず、その平面プランでは、各部の法量がほぼ同一の値を示す。違いは、

両袖の石材幅だけである。また、その壁体構造では、柵石上面から奥壁腰石上面線を設定後、袖石上面と奥壁腰石上面で水平面を整え、この上部に数段の塊石を積み天井石を架構するところや両袖石石材の用法、両側壁から前庭部を一連の壁面として構築しているなど細部にわたって近似している。

以上、王丸清勢A遺跡との比較、検討を試みた結果、今回調査の当遺跡 SO1は、その石室構造が極めて王丸清勢A遺跡 SO1と近似していることが明らかとなった。また、両古墳から出土した遺物を検討すると王丸清勢A遺跡 SO1出土品の須恵器は5世紀の第4四半期(後)とされ、当遺跡 SO1出土の土師器杯も概ねこれと同時期であることから、参考資料となる遺物が少ないため、絶対とはいえないが、概ね、5世紀の第4四半期を当遺跡 SO1の築造年代とすることがで



第10図 王丸清勢A・B遺跡の古墳主体部平面形の比較（1/80）

王丸清勢 B

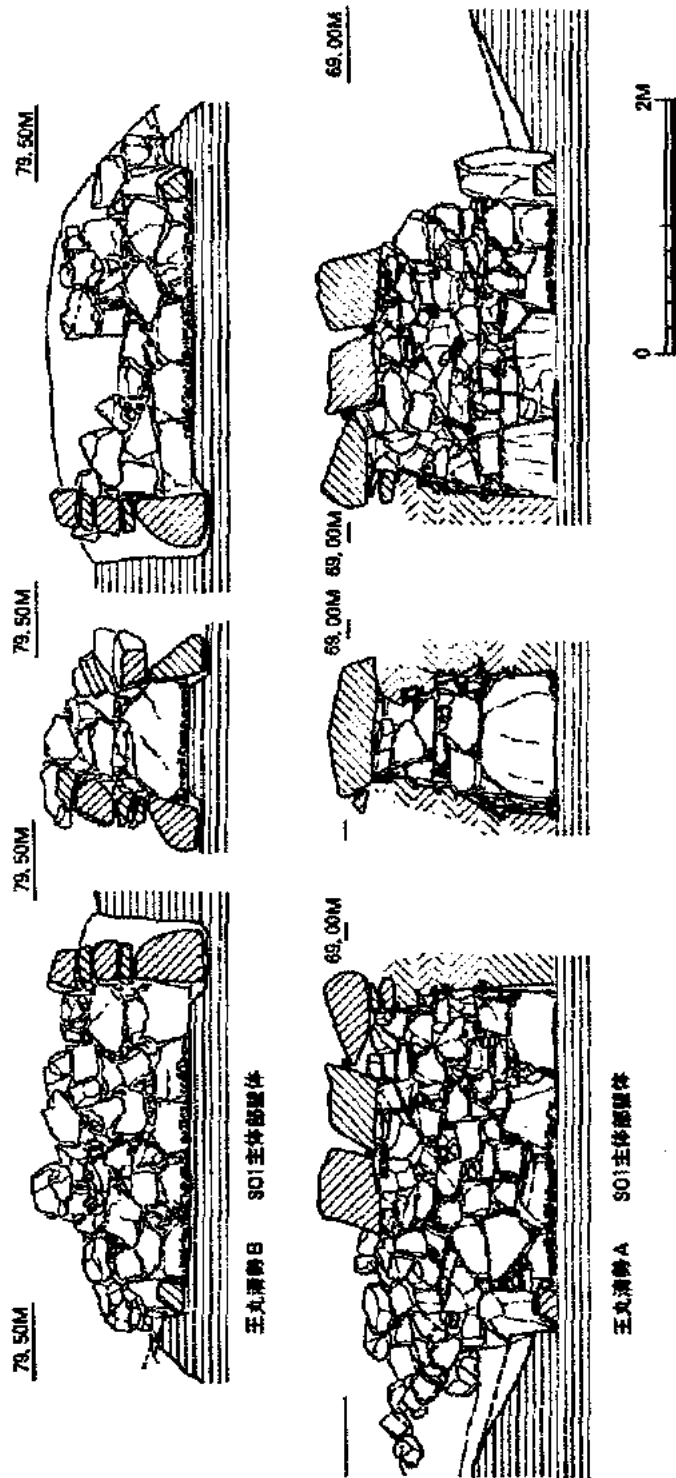
きよう。

ここで、当遺跡の分布する丘陵の古墳群形成をみれば、大きく丘陵尾根線上から丘陵斜面への動き、王丸清勢A遺跡の場合、丘陵北から南への動きがみられる。もし、当遺跡で削平されている北に遺構が存在したならば、王丸清勢A遺跡の場合を踏襲できるであろう。とくに両遺跡SO1のあり方を見ると、同時期に存在した古代家族集団間での占地序列などを考えることができよう。

最後に、当調査にあたり、参加・ご協力いただいた方々に感謝の意を表すとともに、将来、許斐山を核とした舌状丘陵分布の古墳群が明らかとなり、宗像地域の古墳文化を検討する際、当遺跡がその一助となることを願って、この稿をおさめる。

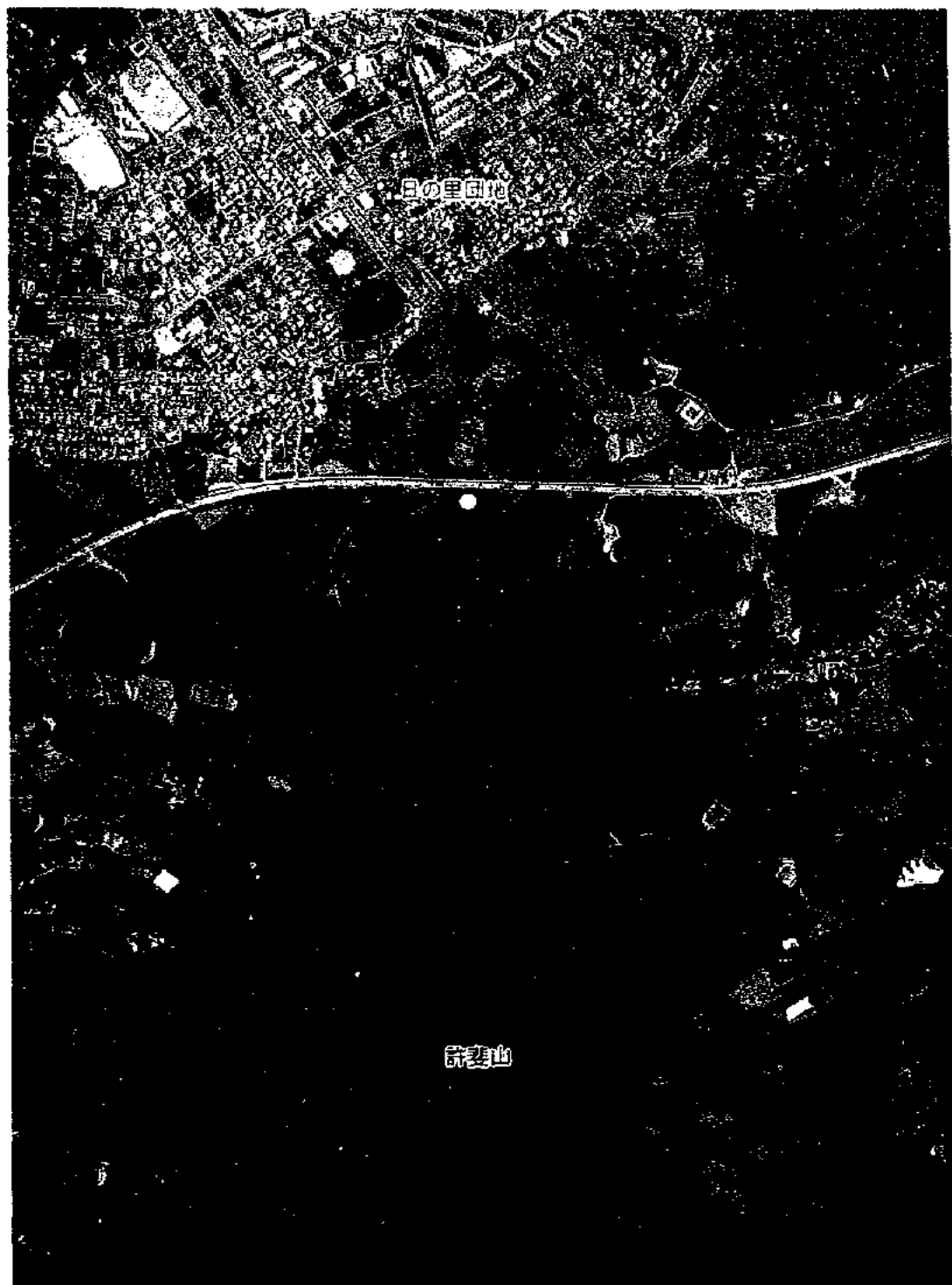
註：1991「王丸清勢」宗像市文化財調査

報告書第33巻 図 後一 編



第11図 王丸清勢A・B遺跡の古墳主体部比較(1/60)

版 图



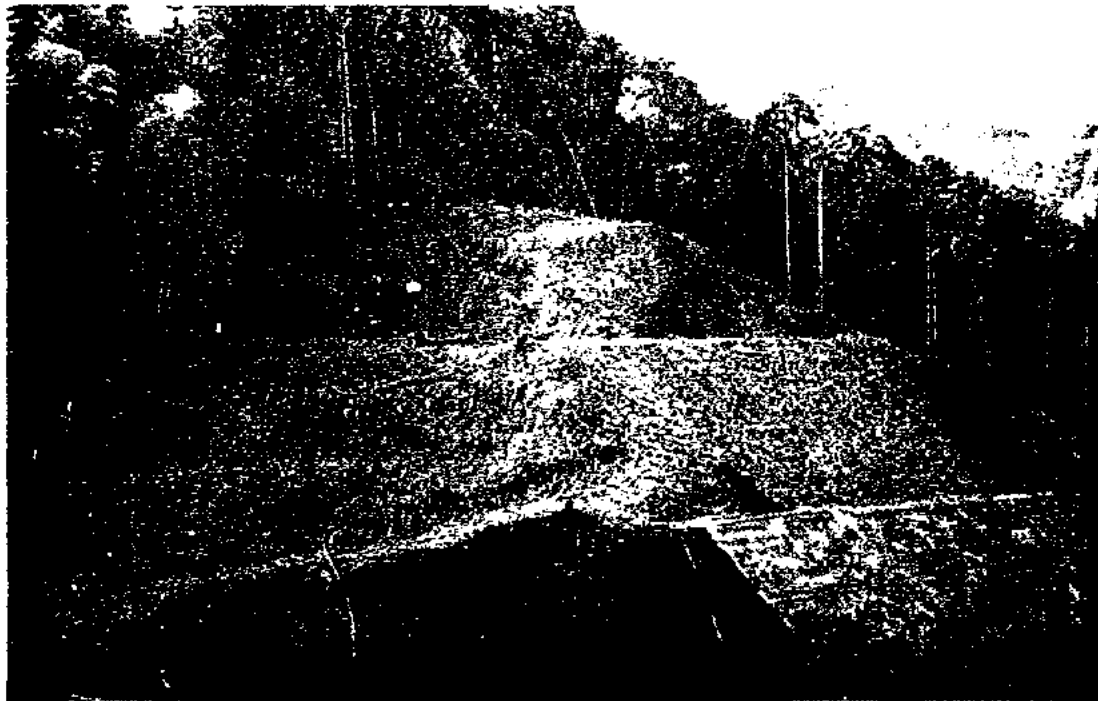
遺跡周辺の航空写真 (1/12,500) 昭和53年6月撮影



図版 2



1. 調査前遺跡景観（北から撮影）



2. 調査前遺跡景観（北から撮影）



1. 調査前遺跡景観（南から撮影）

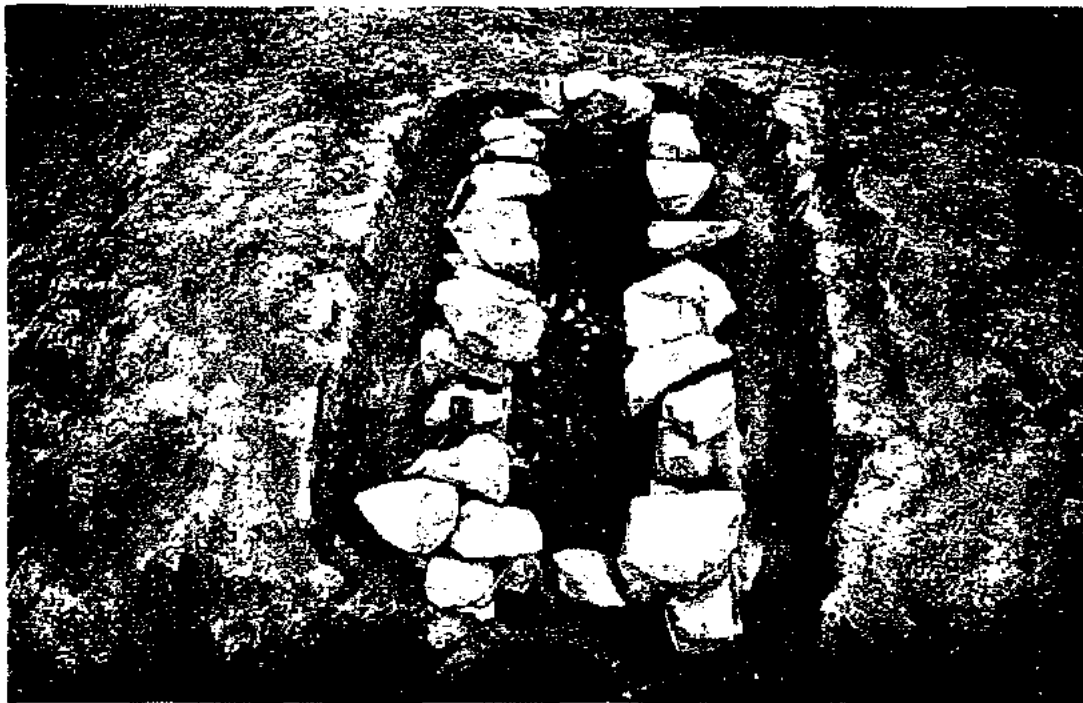


2. 調査前遺跡景観（東から撮影）

図版 4



1. 調査後遺跡景観（南から撮影）



2. S01 全景（西から撮影）



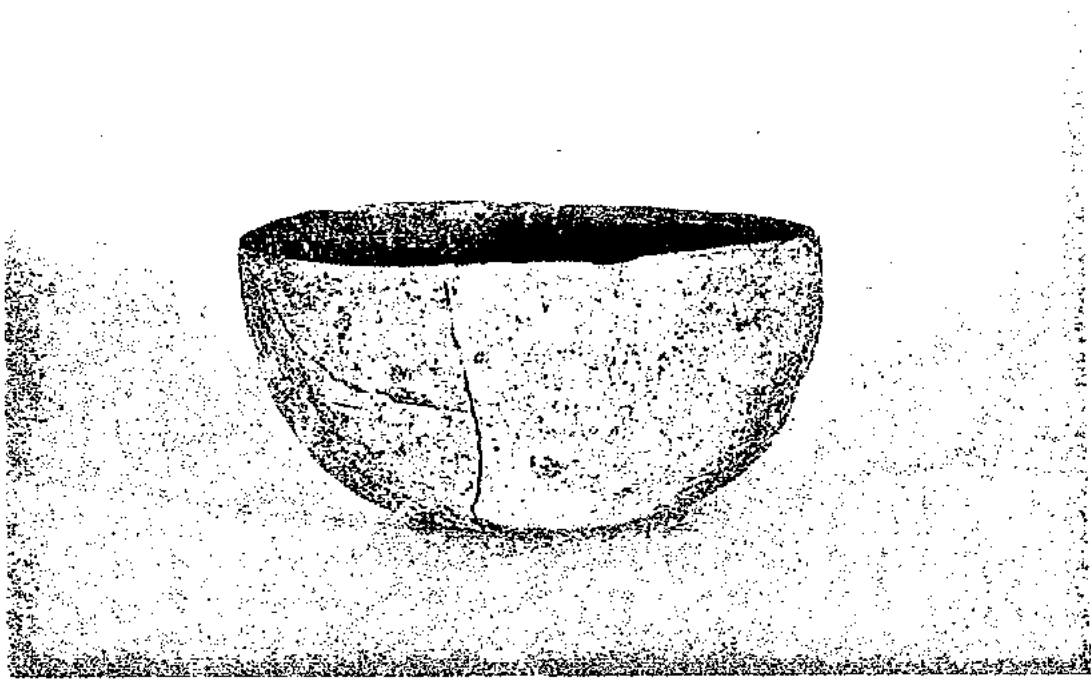
1. S01 奥壁 (西から撮影)



2. S01 左側壁 (南から撮影)

王丸清勢 B

図版 6



1. S01 出土遺物



2. 王丸清勢A遺跡 S01 出土遺物

# 王丸清勢Ⅱ

宗像市文化財調査報告書 第35集

平成4年3月31日

発行 宗像市教育委員会  
福岡県宗像市東郷995

印刷 有限会社システム・レコ  
福岡市東区土井1丁目11-7